日刊 動労千葉

79.3.25

No. 70

(全国版 No.5)

国鉄動力車労働組合
千葉地方本部
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二二五八～九・（公衆）〇四七二(22)七二〇七

3/19・20 千葉地本破壊「オルグ」を粉砕！

鮮明となった革マル分子のセクト的引きまわし！

動労全国の仲間の皆さん！　千葉地本一四〇〇名組合員は「中央本部」の仮面をつけて、「オルグ」などと称して千葉地本を破壊しようとする革マルとそれに追ずいする一部反動分子の3・19～20千葉地本破壊「オルグ」を、完全に粉砕したことを、誇りと自信をもって報告します。　千葉地本全組合員は、この破壊「オルグ」に対する怒りと闘いの中で、より一層の団結をうち固め、規約・規則無視、機関運営ルール無視によって、一方的に「発動」された「執行権停止」を認めず、これをはね返し、革マルとそれに追ずいする一部反動分子によって推進されている動労運動の変質を正し、動労運動の真の階級性、戦闘性をうち立ててゆくために断固闘い抜く決意です。

革マル分子のカクレミノにされた良心的活動家

実際、今回の「破壊オルグ」ほど、革マルと一部反動分子の動労引きまわしを、満天下に示すものはありません。

「班長」と称する中央本部役員が、「オルグ」当日の宿泊場所を知らず、他の「班」がどこに宿泊するのかも知らされておらず、役職に関係なく一部分子だけが全てを知っているということが、各支部における組合員の追及の中で明らかになったのです。　そればかりではありません。

中執をはじめ全オルグ団がこの革マル分子に引きまわされ、千葉市内をはじめとする各地で終日右往左往しなければならなかったのです。

しかも、青木書記長、城石組織部長、小谷中執等、この「破壊オルグ」の主謀者達は第一線から逃亡し、姿をくらましています。

これが、「動労の最大の組織問題」を解決しようとする組織責任者の姿なのでしょうか。

このことについては、やっとの思いで千葉へ入ってきた反動分子の間からも不満の声が出されています。

また、千葉へ「登場」した青年部をはじめとする革マル分子は、自らがつねづね罵倒する「右派幹部＝権力密通分子」を先頭に立ててかくれみのとし、自らはその後にかくれていましたが、それでもなお津田沼、幕張支部へは一歩も入ることができず、終日西船橋駅や西千葉駅などのホームの隅でうちふるえていたのです。（枯息にも彼等はこの実態を「陽動作戦」などと居直っていますが、彼等の動きは終日、千葉地本の監視のもとに把握されていたのです。）

粉砕された革マル分子の策動　各支部の闘い

全国の良心的活動家をタテに、なんとか職場へ入りこもうとした革マル分子は、全支部の毅然たる対応で、一歩も中へ入ることができず、逆に全組合員からひとつひとつの事実を突きつけられ、良心的活動家の前で、この間の悪業の数々を暴露されてしまいました。

しかも、この反動分子どもは千葉運転区においてはビラをはがし、立て看板を燃やすなどし、その不当性をより鮮明に自己暴露しています。

意気あがる千葉地本！　消耗した破壊者集団！

以上の「破壊オルグ」の実態の中で、千葉地本全組合員の意気はますます盛り上っています。一方タテにされ、カクレみのにされた良心的活動家は、「水本」「三里塚」「貨物安定宣言」「暴力」などの路線的誤りを具体的事実をもって追及され、また革マル分子のあまりの横暴さを目の当りにして消耗し、「いまの中央本部はミステリーだ」「千葉の言うことは正しい。私も同じ考えだ」などと言い出し、反動分子はあわてて挑発しても相手にされず、最後は沈黙し、下を向いてしまうありさまだったのです。

これが、「3・19～20千葉地本破壊オルグ」の実態です。

いまこそ決起せよ！

全国の仲間の皆さん！

この「破壊オルグ」を通して、いまや、革マル分子によるデマと暴力をもってする動労引きまわしの実態は鮮明に突き出されています。

いまや、正義と不正義ははっきりしています。

第一〇三回臨中を前に全単産の全労働者、全国の闘う人民がこの動労の実態を見守っています。

いまこそ、決起すべきときです。

革マル分子のセクト的引きまわしによる動労運動の変質を許さず、真の動労運動を確立するために、ともに闘いましょう。